

横光利一と川端康成の関東大震災 被災した作家の体験と創作

十重田 裕 一

The Great Kantō Earthquake in the Lives and Writings
Riichi Yokomitsu and Yasunari Kawabata

Hirokazu TOEDA

1. はじめに

1923年9月1日午前11時58分、南関東を突如襲った関東大震災に文学者たちはどこでどのように遭遇したのだろうか。被災時の場所によって体験は異なり、受けとめ方も千差万別であるが、大震災後に新感覚派の文学者として活躍することになる横光利一（1898～1947年）と川端康成（1899年～1972年）はともに被災者であり、その体験はその後の創作に少なからぬ影響を与えることになる。横光は、「文学の神様」と称された昭和時代前期の代表的な文学者で、その親友の川端は、1968年にノーベル文学賞を日本で最初に受賞したことで世界的にも知られる。

新感覚派が関東大震災後の文学として日本の近代文学史に記述される一方で、横光や川端がどのように被災し、大震災についていかに語り続けていたかはあまり知られていない。横光と川端が大震災について書き残した、あるいは語った言葉をたどりながら、被災した両者の体験と創作がどのようにかわるのかを考えてみたい。なお、本稿は、「第4回東アジア人文学フォーラム『危機と再生——グローバルイズム・災害・伝統文化——』」（早稲田大学小野記念講堂、2012年12月8・9日）の予稿集に掲載の文章に、若干の加筆・修正を加えたものである。

2. 横光と川端の大震災体験

関東大震災は、横光の文学に決定的な影響を与えた大事件であった。横光は神田の東京堂書店の店先

で雑誌を立ち読みしていたときに被災している。大震災に遭遇し「青年期に死に直面して、もう駄目だと思つたこと」が、自身の「文学の根本」をかたちづくったと、横光は後年になって、「転換期の文学」と題された講演で述べ、大震災発生時の様子を次のように生々しく語っている。

震災の時、私は丁度東京堂の店先きに立つて、雑誌の立読みをしてゐた。（中略）狭い道路で家が建て込んで居て、その家がバタ／＼と倒れて行く。それと同時に壁土やなんかがもう／＼と上つて、其の辺は真黒になる。だが上から何が落ちて来るか解らないので、眼を閉ぢる訳にいかない。眼を開いてみると土ほこりが入つて痛い、我慢してゐる。其処らに居た人は互ひに獅嚙附いて固つてゐる。私はその時これが地震だとは思はなかつた。これは天地が裂けたと思つた。絶対にこれは駄目だ、地球が破滅したと思つた。

（1939年6月21日、東京帝国大学）

横光は東京堂書店での被災直後、火事になった神田から逃げるために駿河台方面に出て、下宿のある小石川に向かうことになる。横光の住まいの被災状況については、友人の川端康成の証言がある。「私が見にゆくと、古びて粗末な下宿は、一階が傾き、二階は真直ぐに立つてゐた」が、再度見に行くと倒壊し、どのあたりにあったかもわからなくなっていたと、川端は証言している（「思ひ出二三」『日本文

学全集 第29巻 横光利一集 月報』新潮社、1961年)。このように語る川端は、「大火見物」(『文藝春秋』第1巻11号、1923年11月)のなかで、千駄木町の下宿の二階で被災したときの状況を「地震の時、私は大したことはなかつたらうと思つて、二階から容易に動かなかつたが、瓦の落ちる音が激しくなつたので、階下へ下りた」と記している。

川端は、大きな被害に遭うこともなく無事であったために、芥川龍之介(1892~1927年)、今東光(1898~1977年)とともに、大震災直後の東京を見て回ることになる。川端はその体験について、大震災から5年半後、「芥川龍之介氏と吉原」(『サンデー毎日』第8年3号、1929年1月13日)のなかで、「芥川氏と今君と私とは、多分芥川氏が云ひ出されたやうに思ふが、吉原の池へ死骸を見に行つた」と述べている。芥川に誘われて、今とともに、大震災後直後、吉原遊郭近くの池に死骸を見に行つたことになるが、川端は、大地震から「二三年の後いよいよ自殺の決意を固められた時に、死の姿の一つとして、あの吉原の池に累々と重なつた醜い死骸は必ず故人の頭に甦つて来たにちがひないと思ふ」と、この時の記憶と1927年の芥川の自殺とを結び付けて語っていた。

被災した場所は異なれども、横光と川端は、いずれも生命を脅かされる体験をしていたが、大震災の衝撃をより強く受けたのは、横光の方であるように見える。横光は大震災の恐怖について、どのように語っているのだろうか。次に、それを見ていくことにしたい。

3. 「心に受けた恐怖」と創作の停滞

田山花袋(1871~1930年)は、関東大震災の見聞録『東京震災記』(博文館、1924年)のなかで、作家たちは「大抵山の手に住んでゐた」ため、「文壇には大した犠牲を払つたものはなかつた」と書いている。しかし、デビューして間もない横光は、大学在学時からの「粗末な下宿」に住んでおり、このなかに含まれてはいなかったに違いない。横光が居住していたのは山の手とされる旧小石川区であったが、居住先の下宿は倒壊している。関東大震災では、東京のなかでも下町とされる地域が地震と火災によって大きな被害を受けたことはよく知られているが、被災状況は地域によって異なり、さらに家屋の状況によっても左右された。横光の場合、大学時代

から居住していた「粗末な下宿」が倒壊したため住む場所を失い、友人の作家、小島勲(1900~1933年)の家にしばらく身を寄せることになったのである。

被災後の横光の様子は、大震災後間もない頃、友人の詩人、佐藤一英(1899~1979年)に宛てた1923年9月19日消印の葉書からうかがえる。横光はここで、「家が潰れて了つたので小島の所へ避難して来てゐる」、「此の頃は何か手紙も手につかないので失礼」と自分の被災状況を記していた。「手紙も手につかない」と書かれているところからは、大震災による衝撃と現実への対応のために創作も手につかなかつたことが想像される。事実、横光は被災してしばらくの間、目立った創作をほとんど発表していない。

そのような状況下で、横光は、『文藝春秋』の震災特集号に「震災」(『文藝春秋』第1巻11号、1923年11月)という文章を寄稿している。大震災直後、多くの雑誌が震災特集を組んでいるが、菊池寛(1888~1948年)の主宰する雑誌『文藝春秋』もその一つであった。そこには、菊池「災後雑感」、川端「大火見物」などととも、横光の「震災」も掲載されている。横光はこのエッセイで、「稀有な災厄」による被災者の「心に受けた恐怖」に言及し、次のように述べている。

東京附近に住んでゐたものなら、かう云ふ地震がいつれ近々来るにちがひないとは、誰も予想してゐたことと思はれる。しかし人々は不思議にその災厄の予想については一様にぼんやりとしてゐた。地震に逢つて初めて、かう云ふ地震はもう必ず来るに定つてゐると思つてゐたと云ひ出し思ひ出した。それが皆尽く偽ならぬ心から云ひ出したそれほども、此の地震の来るといふことが、ぼんやりとしながらも尚且つ明瞭に感じられた。それにも拘らず、なぜ此の災害をこれほど大きくして了つたか。それは一口の平凡な言葉で云ひ切ることが出来る。「人間はあまり功利であつたが故に。人々は大声を發して警告し合ふ暇を忘れてゐた。」と。

横光は「震災」という文章のなかで、自分たちの生存中には大地震が起きることはないと思ひ込んだ「功利」主義のために、「人々は大声を發して警告し合ふ暇を忘れ」、被害がより甚大なものになったこ

とを指摘していた。こうした考え方は、たとえば、夏目漱石（1867～1916年）の門下の文人としても知られ、大震災について多数の文章を著した寺田寅彦（1878～1935年）が、科学者の視点から警鐘を鳴らしたことなどとも少なからず呼応する。

横光が「心に受けた恐怖」と向き合いながら、震災後に新たな言語表現を模索し、「稀有な災厄」を忘却することなくその記憶を持続的に喚起してこうとしていた点は興味深い。新感覚派の文学は、従来の文学を否定する奇を衒った表現運動と当時の文壇では見る向きが少なくなかったが、大震災後の世界を表現するために、新しい言語表現を必要とした若い文学者たちの模索の軌跡でもあった。

4. 再構築される断片化された言葉 ——横光の描く復興する東京

関東大震災の痕跡を、横光の創作にどのように見出すことができるのだろうか。評論・エッセイ・講演における大震災への言及はしばしば見られるが、直接の題材にすることを回避していたように思われる小説でも、1923年9月1日の非常事態に遭遇しなければ書かれなかったであろう小説のタイプがある。そこでは、大震災後に復興する市街を語彙・統辞・修辞からなる文体に工夫を凝らすことで表現が試みられた。それは、大震災によって断片化した言葉を、新たな視点から連結、再構築し、言語による斬新な形式を生み出そうとする実験に見える。このような表現の試みは、それ以前から萌してはいたものの、大震災以後、より意識化されていく。

大震災から1年後の1924年10月、横光は、川端ら『文藝春秋』の編集同人たちとともに、新しいタイプの文芸同人雑誌『文藝時代』を金星堂から創刊している。その創刊号には、不測の鉄道事故に戸惑う群衆の混乱を描いた、横光の短篇小説「頭ならびに腹」が掲載している。この小説は、次のようにはじまる。

真昼である。特別急行列車は満員のまま全速力で馳けてゐた。沿線の小駅は石のやうに黙殺された。

冒頭の斬新な表現が話題を呼び、評論家の千葉亀雄（1878～1935年）によって、横光をはじめとする『文藝時代』同人たちは「新感覚派」と呼ばれる

ようになり、この呼称が一般化することになる。

大震災後、横光は急速に復興する東京に強い関心を示し、「無礼な街」（『新潮』第41巻3号、1924年9月）、「街の底」（『文藝時代』第2巻8号、1925年8月）など、市街を題材にした小説を創作している。他にも、「セメント製アパートメント。丘と丘とを填充した義齒。」（『朦朧とした風』『改造』第9巻7号、1927年7月）、「今日は昨日の続きである。エレベーターは吐瀉を続けた。」（『七階の運動』『文藝春秋』第5巻9号、1927年9月）などが、有力な文芸・総合雑誌に発表されている。これらの小説では、復興する市街に現出するコンクリートの共同住宅やデパートのエレベーターを比喻や擬人法などの修辞や、非人間の主語を駆使し描かれている。震災後の市街を印象づけるモノを指標する語彙と修辞と統辞を相俟って、復興する市街に生命が吹き込まれ、都市の動態が表現されていたのである。

こうした横光の小説の特色は、関東大震災あるいはその復興事業を直接には表現していない点である。エッセイや評論では、関東大震災についてたびたび言及した横光であったが、この時期の小説のなかでそれを積極的に描こうとはしていない。それは、大震災後の都市を抽象的に表現しようとした横光の小説の方法とも少なからずかかわっていた。

5. 描かれることのない帝都復興祭 ——川端康成の『浅草紅団』

一方、川端康成の場合はどうであったか。復興する市街への注目は、具体的な地名をタイトルにかかげ、関東大震災についてもとりあげた小説「浅草紅団」にうかがえる。この小説では、繁華街の浅草を舞台に、そこに出没する不良少女の活躍が描かれる。浅草の路地裏で遭遇した美しい少女を介して出合った不良少女たちに誘われながら、語り手の「私」が都市を探訪し、読者はそれに導かれながら、大震災前後の浅草を追体験するように物語が進行していく。

横光の場合とは異なり、川端の小説では大震災についての言及がかなり見られる。川端は、大震災から7年後の「帝都復興祭」を翌年に控えた1929年末に、「浅草紅団」を『東京朝日新聞』に連載し、1930年12月に先進社から単行本を刊行する。彼はこの小説のなかで、復興を遂げていく現在の浅草とともに、大震災によって街が灰燼に帰し、忘却され

ていこうとする震災以前の過去の浅草についても書き込んでいる。

大震災以前と以後の浅草の対比は、「浅草紅団」の語り手が読者を昭和の浅草へと誘う冒頭近くの、次の引用からも明らかとなる。「私も諸君の前に——大正地震の後の区画整理で、新しく書き変へられた「昭和の地図」を拡げよう」（第1章）。たとえば、ビルの屋上から浅草の街や隅田川周辺の工事中の建造物を俯瞰のロング・ショットでとらえることで、急速に復興を遂げていく今の浅草の様子が映し出される。その一方で、大震災のために塔が折れ撤去された、浅草の「十二階」として親しまれた凌雲閣への言及からは昔の浅草の記憶が甦る。あるいは、川端自身の体験を踏まえて、「浅草紅団」の語り手の「私」が語る、以下の第20章の引用からもうかがえる。

古い浅草の目じるし——十二階の塔は、大正十二年の地震で首が折れた。

私はその頃まだ本郷に下宿住ひの学生だった。昔から浅草好きの私は、十一時五十八分から二時間と経たぬうちに、友だちと二人で、浅草の様子を見に行つた。

こうした大震災と帝都復興に加えて、1929年10月のニューヨーク株式市場の大暴落に端を発した世界大恐慌も、「浅草紅団」を読むうえで、逸することのできない重要な視点となる。「浅草紅団」は世界大不況の波が押し寄せてくるなかで構想され、不況が深刻化する状況下で連載が開始されていた。復興を遂げていく都市を、震災との関連を明示的にせず抽象的に表現しようとした横光とは対照的に、川端は、大震災後の都市や社会の変容を具体的に小説に書き込んでいた。ただし、関東大震災から復興を遂げていく東京を描いてはいても、1930年3月に執り行われた、復興事業の完成として位置づけられる帝都復興祭については書き込まれることはなかったのである。

6. 世界大戦に匹敵する衝撃

被災した横光は、関東大震災のことを忘却することなく、後年になってもその暴力と恐怖をたびたび想起していたことは、彼のエッセイや講演から明らかとなる。横光が大震災の記憶に深く心に刻み込ん

でいたことがうかがえる文章の一つに、震災から約10年を経て書かれた「雑感——異変・文学と生命」（『読売新聞』1934年1月4日）がある。横光はここで、大震災が「世界の大戦と匹敵したほどの大きな影響」を日本人に与えた、未曾有の大災害であったと記している。関東大震災が第一次世界大戦に比肩する影響力を日本に与えたとするこの印象は、決して大げさなものではなかった。ベルリンオリンピックの特派員としてヨーロッパに渡航した際、1936年7月9日にパリにおいても、横光は、大地震と戦争を関連づけて講演をしている。「我等と日本」のなかで、「この恐るべき、地上の恐怖の中で、何ものよりも暴力を用ひる地震の災厄」が「戦争以上の文化の破壊」をもたらすと、横光は語っていた（『考へる葦』創元社、1939年）。また、欧州から帰国後発表の小説「厨房日記」（『改造』第19巻1号、1937年1月）のなかでも、関東大震災とは明示していないが、「地震が何より国家の外敵だ」「一回の大地震でそれまで営々と築いて来た文化は一朝にして潰れてしまふ」などと、歴史的に繰り返されてきた大地震について登場人物に語らせていた。さらに、「地が揺れる」（『東京日日新聞』1938年8月7日）では、「その土地が揺れ動くといふ国と、絶対に不動であるといふ国」の認識や考えの相違について言及していたのである。

パリでの講演から5年後に刊行された、『三代名作全集——横光一集』（河出書房、1941年）に収録の自作解説「解説に代へて（一）」で、横光は、関東大震災と自身の創作とを関連づけながら次のように書いている。

……大正十二年の大震災が私に襲つて来た。そして、私の信じた美に対する信仰は、この不幸のため忽ちにして破壊された。新感覚派と人人の私に名づけた時期がこの時から始つた。眼にする大都会が茫茫とした信ずべからざる焼野原となつて周囲に擴つてゐる中を、自動車といふ速力の変化物が初めて世の中にうろろとし始め、直ちにラヂオといふ声音の奇形物が顕れ、飛行機といふ鳥類の模型が実用物として空中を飛び始めた。これらはすべて震災直後わが国に初めて生じた近代科学の具象物である。焼野原にかかる近代科学の先端が陸続と形となつて顕れた青年期の人間の感覚は、何らかの意味で変

らざるを得ない。

この文章は、大震災から18年後に発表されたものであるが、未曾有の災害がもたらした、「美に対する信仰」の崩壊と「人間の感覚」の変容を近代科学と関連づけながら具体的に解説していて興味深い。大震災によって灰燼となった「大都会」に出現した「近代科学の具象物」が、「青年期の人間の感覚」を変容させたことを指摘する横光自身はこのとき25歳であり、「感覚」の変容を体験した「青年」のひとりであった。「近代科学の具象物」としてここにあげられている「ラジオ」は震災後に出現したニュー・メディアである。ラジオ放送が日本で開始されたのは、大震災から1年半後の1925年3月であった。「自動車」「飛行機」は必ずしも震災後に現れたものではないが、横光には大震災後に目に見えて普及していたように感じられたのであろう。

7. おわりに

関東大震災によってそれまでの東京の市街が瓦解し、新しい都市が形成され、そこに出現してくる「近代科学の具象物」が、この時代を生きる「人間の感覚」を変容させる。大震災後に変容した「人間の感覚」を表現するためには、それまでとは異なる小説の言葉が必要と、横光は考えたのであった。体験のありようは横光とは同じではないが、川端もまた、震災後の東京を表現しようとしていたことは既に述べた。関東大震災を契機に、横光と川端は復興する都市とそこに現れた様々な物象を題材としながら小説を書くことになる。大震災による感覚の変容、それが新感覚派文学の発生と深い結びつきをもつのである。

被災した横光の「心に受けた恐怖」は癒えたわけではなく、大震災発生時の衝撃は記憶に深く刻み込まれ、たびたび脳裏に甦ったに違いない。大震災との遭遇が存在を揺るがす体験として記憶されたにしても、横光は、常にそのことを考えながら日々生活していたわけでも、創作をしていたわけでもない。大震災の衝撃が常に継続的に意識されたというよりは、存在を揺るがす体験の記憶が持続的に明滅し、脳裏に焼きつけられた震災の記憶が時を隔てて鮮烈に甦ってきたように見える。横光の関東大震災についての発言をたどってきて気づくことは、10年以上の時間を経てもなお、この未曾有の大災害によ

て「心に受けた恐怖」について繰り返し語り、その意味を問い続けていたことである。

【附記】本稿は、『早稲田文学記録増刊 震災とフィクションの“距離”』（2012年3月）掲載の拙稿「被災した作家の体験と創作——新感覚派の大震災」に基づき、本フォーラムのために、加筆・修正をしたものです。